

内容紹介

「債権を放棄してほしいです」「減額してください」——福島原発事故は、家や職を失っただけでなく、ローン返済に苦しむ被災者も生み出した。県内外の避難先で暮らす彼らの生活費は義援金や東電の賠償金が主で、返済にまわす余裕はない。大熊町にいた一人の女性司法書士が立ち上がった。カードローン会社や消費者金融に返済金の減額や過払い金返還を交渉し、動けない被後見人のために東奔西走する彼女の無償の奮闘を通して、原発事故がもたらしたもう一つの不条理を紹介する。

初出

朝日新聞 二〇一三年八月二十六日～九月十日

目 次

- [第1章 義援金から払うのか](#)
- [第2章 事故のおかげ？違う](#)
- [第3章 3分の1の業者だけ](#)
- [第4章 依頼は断らない](#)
- [第5章 手荷物一つで福島へ](#)
- [第6章 非常時です。入金を](#)
- [第7章 賠償金で返すしか](#)
- [第8章 「8カ月でこんなに」](#)
- [第9章 遺影代わりの似顔絵](#)
- [第10章 3人を守る義務](#)
- [第11章 後見人どう証明する](#)
- [第12章 私が引き取ります](#)
- [第13章 あなたしかいない](#)
- [第14章 「だって、悔しい」](#)
- [第15章 今度は自分の再建だ](#)

第1章 義援金から払うのか

2013年1月29日、福島県大熊町の司法書士、菅波佳子（すがなみよしこ）（42）はカードローン会社に電話していた。依頼人の借金、99万円についての交渉だ。

穏やかな声だが、きっぱりと告げる。

「債権を放棄してほしいのです」

借金をゼロにしてくれということだ。一瞬、間があいたが、相手は鼻で笑うように答えた。

「冗談でしょう。それは無理ですよ」

佳子は食い下がった。

依頼人である南相馬市の男性（64）は、原発から16キロの避難指示解除準備区域に家がある。今は宮城県に避難中で、原発事故のため職も失った。年齢が年齢なので再就職は難しい。そうした被災状況を淡々と説明していく。電話を始めてから20分近くが過ぎた。

電話の向こうで、担当者は何か考えている。

「利息だけだったら免除も可能かと思うのですがね。しかし、元金などとても……」

佳子は一気にトーンを上げた。

「この方、義援金や賠償金でやっと思らしてるんですよ！ そんな人から金を取るというんですか！ 減額してください！」

義援金は法律で差し押さえが禁止されている。そこから払えというのか。

相手の返答がちよっと変わってきた。

「……上と相談してみます」

1週間後、担当者から電話がかかってきた。

「上司の了解が取れました。99万円の元金を40万6千円に減額、一括返済。それでどうでしょう」

貸金業者が借金を半額以下に減額したのだ。通常ならあり得ないことだ。佳子は壁をひとつ突破した。

男性は他のローン会社にも64万円の借金があった。佳子はそことも交渉し、元金の3分の2を減額させた。2社合わせた元金163万円は60万円に減った。

大熊町には、司法書士は佳子しかいない。原発事故前、事務所には多重債務者が大勢相談にきていた。

事故の3カ月後、佳子はびつくりした。彼らのほとんどが、義援金や東電の仮払金からローンを返そうとしていたのだ。

第2章 事故のおかげ？違う

大熊町の司法書士、菅波佳子（42）が163万円の借金の減額に成功した男性（64）は、震災以前は大熊町のタクシー会社で配車係をしていた。

自宅は南相馬市で、一人暮らし。原発事故後は、めいがいる宮城県大崎市に避難している。

借金が半以下に減ったため、東京電力の賠償金から一括払いすることができた。

「菅波さんには本当に感謝しています。これで気が楽になりました」

大崎市のファミリーレストラン。ジュースを前に、男性はほっとした表情で取材に応じた。

「原発事故のおかげで借金を返すことができました」

債務者たちは「事故のおかげで」という言葉をよく口にする。それを聞くたびに、佳子はいらだつ思いがする。

「それは違うでしょ、といってやりたい。ほんとにみんな、人がいいんだから」

原発事故の1カ月前に、男性は個人向けの民事再生手続きをスタートさせた。事故がなければ、半年後には裁判所から認可が出る予定になっていた。

そうならば、256万円あった借金は全部で100万円で減額される。タクシー会社の仕事を続けながら、3年間で払い終える計画だった。

しかし、民事再生には固定収入があることが要件になっている。

勤め先のタクシー会社が原発事故で閉鎖となり、解雇されて職を失った。民事再生の申請は取り下げざるを得なかった。法的な救済を受ける機会を、男性は原発事故で逃してしまったのだ。

「原発事故のおかげで大損しているんですよ。なのに原発事故のおかげで借金を返せた、なんていうんだから」

男性はローン会社2社の借金は完済できたが、住宅ローンはいまも1千万円ほど残ったままだ。

ローンが残るその家も、住めはしない。2011年秋に様子を見に行ったとき、家の土台はシロアリに食われてぼろぼろだった。

男性が東電から受け取った賠償金はいまのところ約1千万円だ。ローン会社の借金の返済に使った以外、そのままにしている。

「今後のことを思うと、とても手をつける気になれません。もうお金に追いかけられる生活はいやですから」

第3章 3分の1の業者だけ

菅波佳子（42）の要請に対し、貸金業者はなぜ通常ならあり得ない減額に応じてくれたのだろうか。

司法書士として、佳子はカードローン会社30社に減額を求めた。うち3分の1の10社が元金を減額してくれた。

三井住友カード、クレディセゾン、そして福島県内の大東クレジットサービスなどだ。

しかし、減額の理由を尋ねたが、どこも明かしてくれなかった。

消費者金融では4社中、アコムだけが減額に応じた。富岡町の依頼人の元金40万円が、20万円になっている。

どんな理由で減額したのか。

アコムの広報室長、中沢知広（なかざわともひろ）は、社内の内規に基づいて判断していると説明する。ただし内規は社外秘で、詳細は明かせない。

「例えば被災証明書を提出してもらうとか、家が流されたとか、仕事を失ったとかですが、あくまで個別に判断しています」

以前の災害でも同様の措置はとった、と中沢は話す。

「返済のための原資はなにか。それから被災の状況、就業の状況。こうしたことをベースに判断しています」

業者と減額交渉するとき、佳子は「義援金や賠償金から返済金を取らないでほしい」と求めた。被災者にとって義援金や賠償金は命綱だ。そこから取られては生活が成り立たない。

返済原資が賠償金しかない場合、減額理由になる可能性もある。

中沢によると、支払いが滞った者には通常はすぐ電話で状況を確認する。しかし今回は災害の規模を考えて確認作業を半年ほどあとにした。

実は金融庁と経済産業省も関係業界に被災者への配慮を要請し、業界団体は傘下業者に返済に配慮するよう要請していた。返済の一時猶予を検討しろ、などの内容だ。

しかし業界団体の足並みはそろっていない。佳子が扱ったケースではアコム以外の消費者金融3社は減額交渉に応じなかった。減額しないばかりか、中には「遅延損害金を計算します」と避難期間中の延滞金まで要求してきた業者もある。

佳子という。

「震災の規模がこれほど大きかったにもかかわらず、減額に応じてくれる業者が3分の1しかなかった。それが問題です」

佳子が減額を交渉した依頼人は、これまで50人に及ぶ。

第4章 依頼は断らない

震災前に受けた依頼については、菅波佳子（42）は実費以外に報酬は一切受け取っていない。

賠償金から金を取るのか——。ローン会社にそういつて借金を減額させた以上、自分がもらうわけにはいかない。そんな気持ちからだ。

佳子自身、大熊町から福島市に避難中だ。報酬を受け取らないから、東京電力の賠償金で生活費をまかなうしかない。

なぜここまでがんばるのか。

それは、佳子が司法書士を目指した経緯と深くかかわっている。

佳子はいわき市平の出身だ。平商業高校を卒業して地元の信用組合に勤めていた。

ところが2000年、父の建設会社が倒産する。期日までに債務を払えない「不渡り」を出したのだ。

父は56歳だった。不渡りを出しそうになったとき、勤めを休んで父と一緒に弁護士を探した。

どの弁護士に相談すればいいか。とりあえず裁判所に行き、当番弁護士を教えてもらった。

事務所へ行くと、事務員に「うちは忙しい。よそに行ってください」と断られた。

仕方がないので、行き当たりばつりに5、6カ所の弁護士事務所を回った。どこも「忙しい」と門前払いされた。その日はあきらめた。

翌日、電話を片っ端からかけて、やっと引き受けてくれる弁護士が見つかった。まず聞かれたのは「報酬払えますか」だった。

助けてくれるはずの専門家がそっぽを向く。佳子にとって、これは強烈な体験だった。倒産したあとの生活も怖かったが、専門家に断られたことも怖かった。

法律専門家になって、困っている人たちを助けよう。佳子はそう思った。勤めていた信用組合を退職し、法律の勉強を始めた。資格学校の通信教育を受け、半年後にまず行政書士試験を受ける。1回で合格した。これで自信がついた。

司法書士を目指し、再び通信教育を受けた。今度は2年間で習得するコースだ。睡眠時間を5時間に減らし、ただひたすら勉強した。2年後の05年、司法書士に合格した。

翌年、大熊町の大野駅前で開催した。第一原発から4キロしか離れていない。大熊町をあえて選んだのは、弁護士も司法書士もいない「司法過疎」の町だったからだ。

「どんな依頼も断らない」をモットーにした。それが口コミで広がり、依頼人も増えた。

第5章 手荷物一つで福島へ

開業から5年。菅波佳子（42）の司法書士業務は順調だった。

信用組合で窓口を担当していたころ、佳子はこんな経験をした。

店のシャッターが開くなり、くぐるように入ってくる高齢の女性がいた。女性は束になった振込用紙をカウンターに置いた。入金先はアコムやアイフル、武富士など、消費者金融ばかりだった。

女性がやってくるのは、2カ月ごとの年金受給日だった。年金は夫婦で15万円。伝票を処理し、残った1万円ちょっとの金を女性に手渡す。このわずかな金で2カ月間、夫婦はどうやって暮らすのだろう――。

大熊町で司法書士を開業すると、借金を払いきれなくなった人が相次いで相談にきた。信用組合の窓口に来た女性の姿と重なった。

2011年3月12日、福島第一原発1号機が爆発した。

佳子は自衛隊のトラックの荷台に乗せられ、10時間以上揺られて郡山市の郡山高校に避難した。

1週間後の3月18日、避難所を出て、いわき市の実家に行った。

その夜、東京行き的高速バスに乗り込んだ。全国青年司法書士協議会が災害対策会議を開く。それに参加するためだ。

依頼人のことが心配だった。みんな貯金もない人たちばかり。お金に困っていないだろうか。資料をすべて大熊町の事務所に置きっぱなしで依頼人には連絡が取れなかった。

一息つくと、司法書士の有志と一緒に県内各地の避難所を回った。無料の相談会を始めた。相談会は県内だけでなく、避難所がある宮城県でもやった。

3月末、福島市に仕事の拠点を移すことにした。避難者は県内外にいる。いわき市の実家からでは、各地の裁判所に行くのに原発を大きく迂回（うかい）しなければならない。福島市にいた方が便利だった。

家を離れることを母に伝えた。母は「こんなときまで仕事のことを考えなくてもいいのではないか」と涙をこぼした。

知り合いの司法書士の紹介で、福島市内に事務所が見つかった。4月11日、司法書士手帳や文房具が入った小さなバッグ一つを手に、福島市に移った。

移った当時は家具もベッドもなかった。中古車店を経営する同級生に頼み、車だけは手に入れた。

4月、震災前からの裁判が次々と再開された。依頼人たちとは連絡が取れないままだった。

第6章 非常時です。入金を

大熊町の司法書士、菅波佳子（４２）は原発事故から約１カ月後の２０１１年４月１８日、相馬市の相馬簡易裁判所にいた。

依頼人である南相馬市の女性（５２）がローン会社を相手に、過払い金の返還を請求していた。その訴訟の代理人として法廷に立つためだ。佳子は、過払い金請求の依頼人も１０人ほど抱えていた。

過払い金とは法定利息を超えて支払っていた返済金のこと、取り戻せる可能性がある。

相馬簡裁の裁判は、原発事故前に期日が決まっていた。事故後の３月末、簡裁から電話があった。

「予定通り進められますか」

事故で書類が手元になかったり、依頼人と連絡が取れなくなったりして裁判どころではないケースが多かった。

佳子も依頼人と連絡が取れていない。しかし期日を延ばすと、次はいつになるか分からない。依頼人は一刻も早くお金が必要なはずだ。

佳子とはつさに「できます」と答えた。しかし資料はすべて大熊町の事務所に置いたまま避難している。「訴状がないのでコピーしておいてください」と伝えた。

佳子は法廷に立った。しかし立ちながら考えた。悠長に裁判なんかやっている場合なの？

５月１７日。やっと依頼人の女性に連絡が取れた。女性の意思を確認してローン会社と直接かけ合った。

「裁判をやっている余裕がありません。非常時です。過払い金をすぐに入金していただきたい」

女性は２社のローン会社に計８３万円の返還請求をしていた。２社とも裁判で争うことなく、全額の返還を了承した。

中には「裁判を通して……」と渋る会社もあったが、佳子は強く迫った。

「お宅の会社は、今の生活にも困っている被災者に、過払い金を返せないとか裁判を通せとか、そんな残酷なことをいうのですか」

その会社も応じてくれ、１カ月後、全額が入金された。

佳子の粘り勝ちだった。

過払い金の返還が裁判に持ち込まれると、長いときは決着まで１年以上もかかることがある。ローン会社側が減額を求めてきたり、控訴をしたりするからだ。

佳子がかけ合ったローン会社は１０社に上る。そのすべての会社が、裁判によらず、１カ月後に入金してきた。

第7章 賠償金で返すしか

震災前からの借金を抱えたまま、避難生活を送っている人は多い。

2013年7月、菅波佳子（42）は大熊町の男性（36）に会いに行った。

男性は会津若松市の仮設住宅から数日前、いわき市の仮設に移ったばかりだった。5人家族で、子どもは12歳、6歳、2歳になる。

原発事故が起こるまで、男性は大熊町の清掃会社で働いていた。事故の6年前、町内に家建てた。念願のマイホームだ。ローンは1800万円。年収は300万円で、毎月7万8千円を返済していた。

そこに突然、連帯債務者の借金1千万円がかぶってきた。実家の老母の住宅ローンだ。母が返済不能になったのだ。

住宅ローン1800万円の、新たに1千万円の借金。とても払いきれない。事故前年、町内ただ一人の司法書士だった佳子に相談に来た。

佳子は民事再生の手続きを取ることにした。ローン会社と交渉し、1千万円の借金を200万円に減額する返済計画が決まった。

直後、原発事故が起きる。すべてが狂った。清掃会社は閉鎖され、男性は解雇された。定職がなかったら民事再生は認めてもらえない。

男性の選択肢はひとつしかない。東電の賠償金で、住めなくなった大熊町の家のローンと、実家の住宅ローンを払うのだ。もし仮設を出て新しい家を買えば、二重ローンどころか、三重ローンになる。

賠償金の多くは先払いで数年分をもらう精神的慰謝料だ。避難者にとって、それが実質的な生活費になっている。そのお金でローンを払い、家を買ったら、収入がないまま手元には生活費も残らなくなる。

大熊町の家は帰還困難区域で、戻る可能性は低い。自分たちはこれからどこに住み、どうやって生きていけばいいのか――。

男性の2歳になる娘が最近、「おうちに帰りたい」とだだをこねる。娘は大熊町のマイホームで生まれた。しかし娘のいう「おうち」は大熊の家ではなく、最初に避難した会津若松市の仮設住宅のことだ。

せつかくのマイホームが、家族の意識からも消えていく。展望は見えない。せめてローンだけは減額させたい、と佳子と思う。

第8章 「8カ月でこんなに」

菅波佳子（42）は、債務の減額以外にも手間のかかる仕事をしている。後見人だ。

原発事故がおきたとき、佳子は司法書士として3人の女性の後見人を務めていた。1人は富岡町に住む94歳、1人は大熊町の72歳、もう1人は双葉町に住む91歳。3人とも高齢で、認知症だった。

2013年6月27日、佳子は8カ月ぶりに大熊町の自宅に一時帰宅した。

佳子の自宅はJR大野駅の目の前にある。アパートの2部屋を借り、2階に佳子が住み、1階を事務所にしていて、事務所は地震があったときのまま、書類が散乱している。

自宅の点検を早々に切り上げ、佳子は後見人をしている女性たちの家に向かった。一時帰宅もできない彼女らのため、家の様子を見ておきたかった。

双葉、大熊。どちらの家も草ぼうぼうだった。玄関の戸締まりを確認する。家の周りを一周し、外から異変がないか見て回る。

最後に富岡町の女性の家に向かった。女性は郡山市に避難し、13年5月、一度も家に帰ることなく96歳で亡くなっていた。

女性の家は福島第一原発から7キロのところにある。3月、帰還困難区域になった。

国道6号沿いのバリケードを通り抜ける。細い路地に入っていく。

十数メートルほど入ったところで、佳子は道を間違えたかと思った。路地の一番奥にあるはずなのに、家がなかったのだ。

「あっ、やっぱりここだ」

家はおろか、敷地全体が木や草で覆われていたのだ。注意して見ると、草木のすき間からかろうじて屋根の一部が見える。

8カ月前にきたときは、庭に車を入れることができた。玄関まで歩いて戸締まりも確認した。

「まるで森みたい。8カ月でこんなになってしまうなんて」

戸締まりも何も、手の施しようがなかった。つま先立ちになって、草木のすき間から家の様子をカメラに収めた。

原発事故がおきたとき、女性は富岡町の特別養護老人ホームに入所していた。女性の夫も認知症で、ともに佳子が後見人をしていた。しかし夫は事故の前年に87歳で亡くなっている。

知的障害のある娘（60）が1人いて、田村市の障害者用仮設住宅に住んでいる。佳子は遺産の件を話すため、会いに行った。

第9章 遺影代わりの似顔絵

2013年7月17日。大熊町の司法書士、菅波佳子（42）は、田村市の障害者用仮設住宅に行った。

5月に96歳で亡くなった富岡町の女性の娘（60）が暮らしている。娘は知的障害があり、佳子は何度か会っていた。

仮設住宅に連絡をしておいたので、食堂で娘が待っていた。

「菅波さん、久しぶりです」

母親の遺産相続について分かりやすく説明し、家の写真を見せた。娘は写真を手に取り、しばらく黙って見つめたあと、佳子に向かって大きく頭を下げた。

「お父さん、お母さんがお世話になりました」

原発事故前、娘は富岡町のグループホームで暮らしていた。

事故後は施設とともに千葉県に避難し、12年2月、田村市に障害者用仮設住宅ができたので、移った。

富岡町のグループホームで暮らしていたとき、母親の施設とは同じ町内だったので、ときどき職員に付き添われて面会に訪れていた。家も墓もすぐ近くだったから、お盆に墓参りをすることもできた。

しかし、いまは実家から約50キロの道のりで、そう簡単にはいかない。自分1人では家に行くことができないためだ。

障害者用仮設住宅には76人が入所しているが、職員自身も避難者で、仮設住宅から通っている。事故後は職員の退職者が相次ぎ、一人一人に対応している余裕もない。

娘は部屋に戻り、1枚の絵を持ってきて佳子に見せた。フェルトペンで描いた父の似顔絵だった。

娘は避難するとき、アルバムや父の写真をグループホームに置いてきてしまった。母の写真は持っていたが、父の遺影がない。そこで父の似顔絵を描き、額に入れて自分の部屋に飾っていた。

「お父さんの写真だけがないので、顔を覚えているうちに描いたの」

娘はそういった。

毎朝、共同作業場の仕事に出かけるとき、似顔絵の父に手を合わせ、「行ってきます」と声をかける。

夕方、帰ってくると、「ただいま」。それを毎日やっている。

佳子という。

「健常者だったら、大切なものを捜すことも、後から取りに行くこともできるでしょう。認知症や知的障害の人はそれができない。それでも一生懸命、その人なりに何かしようとしているのです」

第10章 3人を守る義務

原発事故の直後、大熊町の司法書士、菅波佳子（42）は気が気でなかった。

後見人をしていた3人の女性は、1人では逃げることもできない。なにが起きているのかを理解する力もなかった。後見人として佳子は3人を守る義務があった。

佳子は1号機爆発の2011年3月12日、大熊町から郡山市の郡山高校に避難する。避難所にいても、3人のことが心配でたまらない。

3月18日、いわき市の実家に移ると、すぐに3人の安否確認に取りかかった。

捜すのは大変だった。資料は手元にない。大熊町の事務所に取りに戻ることもできない。

とりあえずインターネットで避難所を調べた。分かっているのは3人の名前だけ。何十カ所もある避難所に、片端から電話した。しかし避難所も混乱していて、名前だけでは捜しきれない。

最初の1週間はなにも分からないまま過ぎた。

2週間後、方法を変える。各地の避難所に電話し、まず富岡町役場の職員を捜した。職員は見つかった。女性のうちの1人が入所していた特別養護老人ホームの名を告げ、避難先を探してくれるよう頼んだ。

数日後、職員から連絡があった。施設長の携帯電話が分かった。

佳子はすぐ施設長に電話し、後見人であることを告げた。

「健康に問題はないでしょうか」

後見人をしている人について、次の三つを確認することがもっとも重要だった。

（1）生きているかどうか

（2）保護されているかどうか

（3）お金がすぐに必要かどうか

女性の無事が分かると、続けて聞いた。

「お金は必要な様子ですか。必要なようだったら、私が立て替えて送金します」

食料や衣類など支援物資が届き始めており、生活は当面なんとかかなりそうだと分かり、佳子はやっと少しホッとした。

「今は車がないので、落ち着いたらうかがいます」

自分の携帯番号を伝えて電話を切った。

被後見人の3人は、4月までには確認できた。

しかし、佳子にはもう一つの課題があった。自分が後見人であることを、どうやって関係者に分かってもらうのか。

第11章 後見人どう証明する

被後見人3人の安否確認をしながら、菅波佳子（42）はもう一つの壁を超えようとしていた。

受け入れ先の施設や自治体に、自分が後見人であることをどう証明すればいいか。

後見人関係の資料は大熊町の事務所にある。事務所は福島第一原発から4キロしか離れていない。取りに戻るのとは不可能だった。

思いつく方法は二つあった。

一つは、裁判所で後見人申し立ての書類を出してもらうこと。

実家のあるいわき市の裁判所で書類を取れるのではないかと考えた。2011年3月下旬、インターネットで裁判所のページを調べた。

だが、そこにあったのは、「しばらくの間閉庁します」。

事情を説明すれば対応してくれるかも、と考えて電話した。

「事件番号は分かりません。でも命にかかわることなので、コピーさせてもらえないでしょうか」

しかし、地震で建物が壊れているといわれて断られた。

もう一つの方法は法務局だった。

後見人になったことを登記しているので、その証明書を取得できれば何とかなる。

しかし佳子は被後見人の名前しか覚えていない。証明書を取るには、生年月日や住所などを特定できないとだめだ。無理だと思った。

他に何か方法はないか。

佳子は、司法書士でつくる公益社団法人「成年後見センター・リーガルサポート」の会員だ。そこに後見人の報告書を提出していたことを思い出し、コピーを取り寄せた。

佳子は、個人情報分は黒塗りにしていたことを忘れていた。当然、取り寄せたものも黒塗りで、使いものにならなかった。

3月末、成年後見センターから電話がかかってきた。困っているのを見かね、被後見人の名前を頼りに東京法務局で登記情報を取得してくれたのだ。異例のことだった。

佳子は一度大熊の事務所に戻りたかった。資料がないと仕事にもならない。町役場に何度も要望した。

11年5月10日、ようやくそれがかなった。仕事の公益性が認められたのだ。大熊町に住民が立ち入った第1号だった。

防護服を着て、父が運転する実家の2トントラックで向かった。東京電力の社員1人が同行した。滞在時間は2時間。顧客ファイル、パソコン、預かった預金通帳などを急いで積み込んだ。

第12章 私が引き取ります

菅波佳子（42）が後見人をしている1人、双葉町に住んでいた認知症の女性は、避難先が1カ月も分からなかった。

原発事故が起きたときは91歳。一人暮らしだったので、町の担当者に聞いても避難先が分からない。各地の避難所に電話をかけ続けた。

2011年4月上旬、やっと分かった。埼玉県の特別養護老人ホームに避難していたのを、町の社会福祉協議会職員が探し当ててくれた。

埼玉まで会いに行った。

震災前、女性は佳子を分らず、会いに行くたびに「初めまして」とあいさつしていた。そのつど佳子は後見人という自分の立場を説明しなければならなかった。しかし埼玉では、佳子を見るなり「無事でよかった」と泣きだした。

女性は服の中に猫のぬいぐるみを入れ、大事そうにかかえていた。自宅では猫を飼っていたのだ。

ぬいぐるみをかかえながら、女性はこう聞いてきた。

「猫は大丈夫だろうか」「家政婦さんはどうしてるだろう」

震災がなければ、女性は施設に入るほどの状態ではなかった。

双葉町の自宅は、一人息子が定年退職後にいっしょに暮らそうと建てた家だ。しかし息子は退職直前に死亡した。近い親戚もおらず、女性は1人で暮らしていた。

認知症は重度ではなく、食事も1人で取れた。デイサービスやショートステイを利用しながら、通いの家政婦と畑で野菜を育てたり、歌を歌ったりして暮らしていた。猫との穏やかな生活だった。

しかし、それは自分の家だからできることだった。慣れない土地で、つきあいの長い家政婦もおらず、借り上げアパートなどで暮らすのは無理だ。今の状態では、つねに介護者がいることが必要だった。

女性は訴えた。

「だれも知っている人がいない。早く家に帰りたい」

女性との面会をすませ、佳子が帰ろうとすると、老人ホームの職員に呼び止められた。

「身元の引き受けはどなたがやるのでしょうか」

以前に人所者が亡くなったとき、後見人だった人が来なくなり、未払い代金もそのままだったことがあるという。今度もそうならないか、心配している様子だった。

「亡くなったら、私が引き取ります」。佳子はきっぱりと伝えた。

第13章 あなたしかいない

司法書士の菅波佳子（42）は原発事故後、新たに2人の後見人を引き受けることになった。

1人は大熊町から避難した88歳の女性。重度の認知症だ。

この女性の場合、震災前に佳子の後見人とする手続きがすでに裁判所で進んでいた。

2011年の4月上旬、福島家庭裁判所いわき支部の調査官から電話があった。

「このまま手続きを進めさせてほしいのですが」

ちょっと待ってください、と佳子は答えた。

震災後、自分自身も着の身着のまま避難を続けている。いま抱えている3人の被後見人のことで手いっぱいだ。

「自分の仕事がこれからどうなるのかも見通しが立ちません。とても無理です」

しかし調査官も引かない。

「その人は生活拠点も定まっていません。現状を把握しているあなたにお願いするしかないのです」

そういわれては引き受けざるを得なかった。条件をつけた。

「本人の生活拠点が安定した段階で、別の後見人に引き継いでもらえるなら……」

半年後の11年9月。福島家裁の書記官から電話があった。

浪江町から避難している91歳の男性の後見人を引き受けてほしいという要請だった。やはり重度の認知症で、長男が裁判所に後見開始を申し立てていた。

男性の家は津波で流された。妻も津波で亡くなり、親類が後見人を引き受けられる状態でもない。

佳子は「とても新しい案件を引き受けられる状態ではありません」と断った。

書記官はいった。

「津波に加え、原発事故の被害者でもあります。被災地域の実情を知らない方では、後見業務が進みません」

結局、こちらも引き受けることになった。

自らも避難しながら後見人業務を務めるのは、財産確認一つとっても大変だった。

男性の場合、通帳も印鑑も津波で流されている。財産は亡くなった妻が管理していたので、取引銀行さえ分からない。

男性はいま、栃木県の山奥の施設に避難している。福島市から新幹線とタクシーを乗り継ぎ、片道だけで4時間かかる。

第14章 「だって、悔しい」

2013年8月30日、菅波佳子（42）は東京地裁にいた。

「武富士の責任を追及する全国会議」の裁判があるからだ。武富士は消費者金融大手だったが、10年9月に経営破綻（はたん）し、会社更生法の適用を申請した。そのため多額の過払い金が戻ってこなくなった。

11年6月、旧経営陣の責任を追及する裁判が始まった。佳子は全国会議の事務局メンバーになっている。裁判がある日には上京し、傍聴する。裁判所前でビラも配る。

裁判が始まる前、原告団のリストがつくられた。余分な返済をしてしまった債務者たちでつくるチームだ。裁判に参加したい債務者を募った。

佳子は迷った。自分の依頼人たちを誘うべきかどうか――。

避難して間もない時期だった。依頼人は避難所や仮設住宅で暮らしている。原告になってほしいけれど、そんな大変なときに何だ、と怒られるのではないか。

裁判が始まって1カ月経った11年7月のことだった。佳子が福島市に開いている仮事務所に、広野町の男性がやってきた。依頼人の1人だ。男性は佳子に尋ねた。

「私も裁判に参加できるのでしょうか」

佳子は驚き、「大丈夫なの？」と尋ね返した。

「だって、悔しいじゃないですか。そのお金があれば、いまの避難生活ももっと楽になるのに」

男性の過払い分は450万円あった。しかし富士は経営破綻し、返還額は大幅カットされた。戻ってきたのは15万円だけだった。

佳子はほかの依頼人にも、原告団に加わってほしいと声をかけることにした。

11年11月、全国会議の事務局長を務める弁護士のと川智志（おいかわさとし）（48）を福島に招いた。福島市、郡山市、いわき市の3会場で説明会を開く。佳子が自家用の小型車を運転し、及川を乗せて会場を回った。

佳子の依頼人のうち、8人が参加を希望した。福島県全体では30人。30人の過払い金総額は7800万円に上った。

佳子の依頼人たちは、一生懸命に借金を返済してきた。返さなくてもいい分まで。それなのに富士は会社更生法を申請したことを理由に、金を返そうとしない。

「その金が避難者にとってどれほど大きいか。こんな不条理ってありますか」

第15章 今度は自分の再建だ

菅波佳子（42）は、原発事故からの半年間で40カ所以上の避難所を訪れ、住宅ローンや借金問題の無料相談会を開いてきた。1人でそんなに避難所を回った者は、行政関係者でも少ない。

2013年3月、全国青年司法書士協議会の副会長を退任した。とはいえ今もハードな毎日が続く。最近だけでもこんな具合だ。

8月20日 被後見人の裁判でいわき市へ。車で往復4時間。

22日 被後見人の面会で埼玉へ。

28日 司法書士会合で東京へ。

29日 相談会で南相馬市へ。車で往復3時間。

30日 富士の裁判で東京へ。

朝は6時前に起床。仕事を終えて事務所を閉めるのは夜8時ごろ。

家に帰ってからは、ネットのブログを更新する仕事が続いている。

タイトルは「司法書士菅波佳子のブログ」。始めたのは避難して2週間後の11年3月26日だ。ブログなんてこれまでやったことはなかった。本を買ってきて勉強した。

最初は、全国の司法書士に原発事故の被害状況を報告するつもりだった。しかし、東京電力の賠償のことを書いたら、避難者から「参考になりました」とコメントが届いた。

複雑で分かりにくい賠償の問題点を、佳子が分かりやすく解説する。それが人気を呼んだ。いまは1日1千件ものアクセスがある。

13年7月22日、佐賀・玄海原発の差し止め訴訟原告団に参加を申し込んだ。原発から4キロの場所で暮らしながら、佳子は原発の危険性を知らなかった。知ろうとしなかった。その悔しさから、参加を決めた。

震災前、債務整理や過払い返還の依頼人は80人ほどいた。それがあと10人ほどまでになった。託された仕事がすべて終わったら、今度は自分自身の再建だ。

司法書士は複数の事務所を持たない。いまの福島市の仮事務所はたたみ、どこかに自分の事務所を構えなければならない。

これから避難区域の解除が進むだろう。人々がいま手にしている補償は打ち切られることになる。生活に困る人が増えるに違いない。そういう被災者が多いところとなると、やはり大熊町に近い場所だ。

「相談できる専門家がなくて、困っている人はたくさんいるはずですから」

プロメテウスの罠〔35〕 ローン減らせ「大熊町の闘う女性司法書士」

著 者 朝日新聞（前田基行）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2013年10月11日 WEB新書版発行

2013年12月31日 EPUB版発行

©2013 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-116-5

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2013年10月11日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。